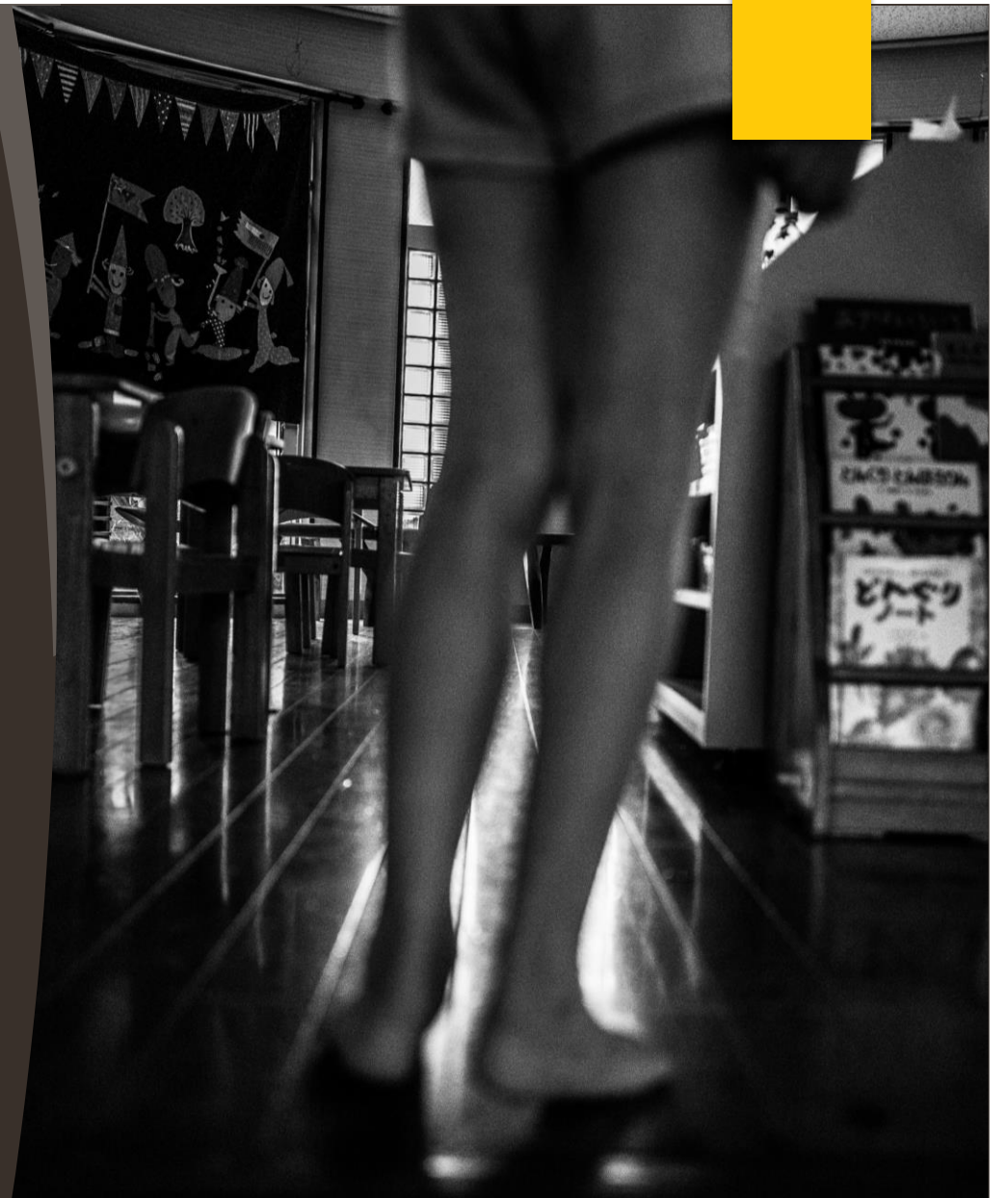
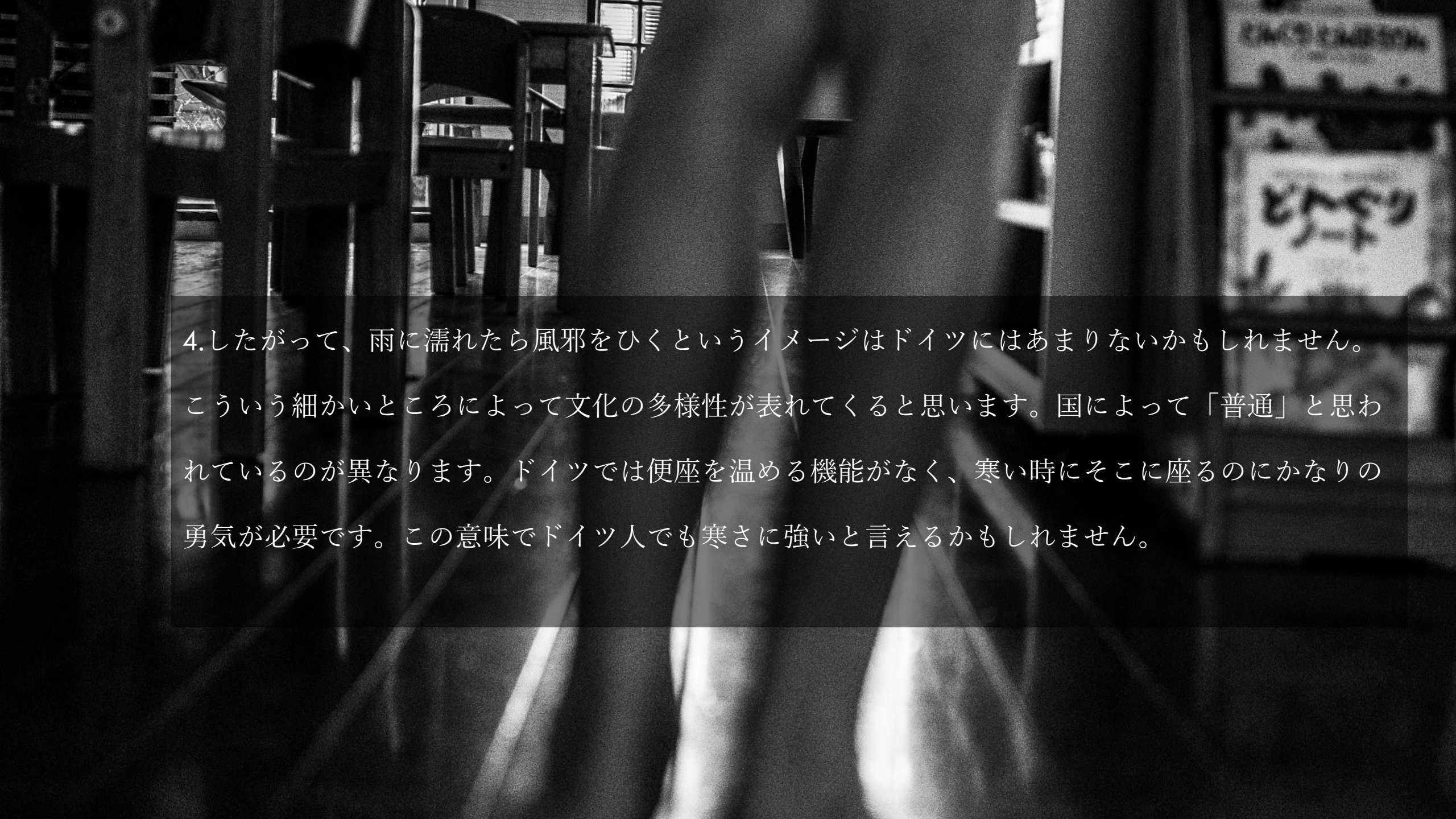


1月 「Barfuß」 アントニア・シュルト

1. 今朝起きたら、外は -3°C でした。寝室の壁に付けている寒暖計を見たら、家の中は 2°C ぐらいでした。自宅は寒いですが、寝るときは布団二枚、掛布団3枚、食べる時はこたつと味噌汁で体を温めます。職場では暖房が常に入っていますので、家との温度差が大きすぎて、逆に暑いと思う時もあります。
2. 朝、通勤するとき、よく登校班を見かけることがあります。水色の制服で西小林小学校だと分かります。5-6人で、女の子はジャケットとスカートを着て、男の子はジャケットとズボンを着ています。冬用のちゃんとした上着を着ている子どもは滅多に見ません。それは、ドイツ人としてとても不思議に思います。ドイツでは寒候期が9月から4月ぐらいです。子供の頃、その期間中は、家を出ようと思ったら、お父さんやお母さんにまず洋服のチェックがありました。季節に応じた洋服ではないと、家を出たらだめですから。ちなみに、帽子をかぶっているか、手袋をはめているか、スカーフ、冬ブーツなどが親に確かめられました。その中で、一番厳しく見られたのはちゃんとした冬ブーツと上着だったと思います。もし、何か足りないと判断されてしまったら、「So gehst du mir nicht aus dem Haus」と言われました。



3.要するに、「こんな格好じゃダメ！！」という意味です。万が一子どもが洋服のチェックをどうにかくぐれて、ふさわしくない洋服で家を出て行ってしまったら、友達の前でも構わず、叱れたはずです。そういうドイツの文化の中で育ってきた私は、日本に来て少しびっくりしました。最初の頃、保育園訪問をしたとき、とんでもなく寒いホールで、裸足と半ズボンで子どもたちが正座していました。寒くないの？と思いながら、自分の足を温めるためにぴよんぴよんしていました。日本のお父さんとお母さんは、子どもに対して色々なことでとても気を遣っているような印象ですが、なぜだか寒さの中の裸足は問題なさそうですね。ドイツでは、寒い日に温かい洋服を着ないと風邪をひいてしまうと考えられているのに対して、日本では子どもを寒さに当てると強くなるという考え方がありたいです。



4.したがって、雨に濡れたら風邪をひくというイメージはドイツにはあまりないかもしれません。こういう細かいところによって文化の多様性が表れてくると思います。国によって「普通」と思われているのが異なります。ドイツでは便座を温める機能がなく、寒い時にそこに座るのにかなりの勇気が必要です。この意味でドイツ人でも寒さに強いと言えるかもしれません。